「バルナブース」の変化
――『A. O. バルナブース全集』の「日記」における人物像――

佐藤　みゆき

［キーワード：①日記　②幼年時代　③自己探求　④再生］

1.　はじめに：「日記」の誕生

Valery Larbaud（ヴァレリー・ラルボー、1881–1957）の *A. O. Barnabooth, ses Œuvres complètes, c'est-à-dire un conte, ses poésies et son journal intime*（『A. O. バルナブース全集、すなわち一つの短篇、詩および日記』1913、以下『全集』と略記）[1] の第三部に収録された « Journal intime »（「日記」）には、『全集』の主人公である23歳のアメリカ国籍を持つ南米出身の億万長者の青年、Archibald Olson Barnabooth（アルシバルド・オルソン・バルナブース、以下バルナブースと略記）による、ヨーロッパ周遊時の日常生活や内面が綴られている。自らを詩人と称する彼は、旅行開始の九ヵ月後、同郷の女性との結婚を機に祖国への帰郷を決意し、筆を置く。『全集』に収録された作品は、« Conte »（「短篇」）の « Le Pauvre Chemisier »（「哀れなシャツ屋」）、38篇の « Poésies »（「詩」）もあわせ、それぞれをバルナブースの内面の成長の記録として読むことができるが、とりわけ『全集』の約八割の分量を占める「日記」は、彼の「書く行為」の記録でもある。

「日記」は、『全集』の前身となる作品で1908年にラルボーが匿名で出

版した *Poèmes par un riche amateur, ou Œuvres françaises de M. Barnabooth*（『裕福な好事家の詩、あるいはバルナブース氏によるフランス語の作品』、以下『裕福な好事家の詩』と略記）に収録された « Biographie de M. Barnabooth »（「バルナブース氏の伝記」、以下「伝記」と略記）を改作したものである[2)]。その契機となったのは、André Gide（アンドレ・ジッド、1869−1951）が1909年 2 月に月刊文芸誌 *La Nouvelle Revue Française*（『新フランス評論』、以下 *N.R.F.* と略記）にバルナブースの日記の必要性を望む批評を寄せたことにある。ジッドを敬愛していたラルボーは要望に応えて « Journal d'un milliardaire »（「ある億万長者の日記」）を執筆し、1913年に *N.R.F.* 2 月号から 6 月号までの五回にわたって作品を掲載したのである[3)]。その後、1913年 7 月15日の『全集』出版時に、「ある億万長者の日記」は第三部の「日記」と題して収録されたのである。

『全集』を自己分析の記録として考察した先行研究では、バルナブースの自己探求は挫折に終わった、と結論付けられている[4)]。彼は初日の「日記」に「絶対の探求に人生を費やしているこの僕！」[5)] と綴り、「日記」を含む『全集』の三作品の執筆が探求の過程であることを示している。しかも、彼はそれらの作品を最終的に出版しようとしており、特定されていない読み手の存在を意識した記録媒体としての意味を作品に持たせている。ところが、「日記」の最終部での帰郷への決意、すなわち文明社会であるヨーロッパを離れて、当時は未開の地であった南米に移ることが、新天地への新たな旅立ちではなく、当初の目的を果たし得ないがゆえの逃避であると評されているのである。

けれども、生まれ故郷でしかない南米は彼にとって真の安住の地ではないだろう。確かに「伝記」におけるバルナブースには自我中心的な面が伺える。財力に飽かせて人心までをも手に入れようとする彼の生き方は、『全集』の「哀れなシャツ屋」にも見られるとおりである。しかし、彼は「日記」の終章で同郷の女性 Conception（コンセプシオン、通称コ

ンチャ）とその妹に金銭的な援助を申し入れ、最後にはコンチャに結婚を申し込むと同時に作品執筆をやめ、帰郷を決意するのである。このようなバルナブースの変化は、九か月間の旅の中で、いつ、どのように起きたのだろうか。そこで本稿では、作者ラルボーが「日記」形式を選択した理由を確認したうえで、「日記」の内容をバルナブースの生い立ちと言語感覚の観点から検証することにより、バルナブースの人物像の変化を見ることにしたい。

2.　日記形式の重要性――ジャンルの選択――

日記は、他者という読み手が形式上は存在せず、書き手は自分の考えの赴くままに筆を走らせ、また止めることが可能な、いわば際限のない、かつ断片的な独り言のような文章の連なりである。そして、それらの文章に日付が付与されることで記述が区切られ、日記の体をなす。これらの特徴はバルナブースの「日記」においても確認できるが、加えてバルナブースの場合には、「日記」の開始から終了までの291日間のうち、225日間は日記を執筆していない、というさらなる断章性が見られる。つまり、バルナブースの「日記」とは不連続な断章なのである。すると、「日記」と称した作品において、形式を踏襲しているとはいえ、期間として示された日数の七割以上が省略されたものを、果たして日記体小説と言えるのか、という疑問がわきあがる。自らの回想を時系列に書き連ねるだけならば、「哀れなシャツ屋」と同様に小説の形式を用いることも可能だろう。ジッドの要望があったにせよ、ではなぜ作者ラルボーは日記という形式を選択したのだろうか。

初めに「日記」の形式を確認することにしよう。バルナブースは「日記」を４月11日に書き始め、翌年の１月26日に書き終えた。この291日間のうちバルナブースが日記をつけた66日間の記述内容は、四冊の « cahier »（「手帳」）に分かれている。各々の「手帳」の冒頭にはタイト

ルに続いて旅行先が記されており、一冊の手帳を書き終えた後に旅行先が取りまとめられ、付記されたことを示している。

四冊の手帳の内容を見ると、まず « Premier cahier »（「第一の手帳」）には４月11日から５月10日までの21日分が、イタリアのフィレンツェ滞在中に書かれている。続く « Deuxième cahier »（「第二の手帳」）は、フィレンツェにて５月12日に始まり、サン－マリノからヴェニスへとイタリア国内を移動しながら23日分が記され、［6 月］18日に終了している。その翌日の６月19日からは « Troisième cahier »（「第三の手帳」）が始まり、８月14日に終了するまでの間の11日分が、イタリア北東部のトリエステからロシアへの移動の様子とともに記されている。最後に８月20日に始まる « Quatrième cahier »（「第四の手帳」）には11日分が、ロシアのサンクトペテルブルグからデンマークのコペンハーゲンと英国ロンドンへの移動の間に書かれ、翌年１月26日に故郷に向けて出発するまで続いている。これらの結果から、バルナブースの記述回数と記述量には規則性がないと判断できる。

さらに、一日の記述量がプレイヤード版で１ページ（6 月14日）から14ページにわたる場合（［6 月22日］土曜日）まで様々であること、各「手帳」の総ページ数が、プレイヤード版では「第一の手帳」が約63ページ分、続いて「第二の手帳」が約72ページ、「第三の手帳」が約57ページ、「第四の手帳」が約30ページ分であることから、バルナブースは日記を不連続、不均一に書いており、一冊の「手帳」を書き終えると、次の滞在先への移動を機に新しい「手帳」に交換していることがわかる。「第四の手帳」が他の手帳の半量ほどで終了していることは、日記を書く目的が「手帳」の最終ページまでを埋めることではなく、記述内容に重点を置いていることを示すものである。

この「第四の手帳」は、書き始めから書き終わりまでの期間が８月20日から翌年１月26日までの160日間と四冊の手帳の中で最長であるのに対し、日記の執筆が11日間と「第三の手帳」と同様に短いことから、

「日記」の不連続性の点においても際立っている。例えば58日目（8月29日）と59日目（10月3日）との間に約一か月の空白があるが、バルナブースはこの間についての詳述を避け、10月3日の冒頭で「一か月以上も放り出していたこの日記をまたつける。その間にしたことを手短に書き留めておこう」[6] と、サンクトペテルブルグからコペンハーゲンへの移動やスウェーデン周遊の様子を書いている。その直後の10月8日からは再び74日間の空白の期間があり、12月22日の記述再開時には「あと三週間で僕はヨーロッパを去り、未知ではあるが僕の祖国には違いないあの南米の国に二、三年、もしかしたら永久に住むつもりだ」[7] と、帰郷の決心を固めている。このように、「日記」には複数の空白の期間を含むという特徴があり、バルナブースの重大な決意はその間になされているのである。

その一方で、「日記」を執筆した日であっても、バルナブースがその日の行動や考えの全てを書きとめているわけではなく、バルナブースが毎日欠かさず日記をつけなくても、彼が旅行を継続していることに変わりはない。ひとの思考が一つの物事に対して延々と継続できないことを考え合わせれば、「日記」の記述が断片的であることは日記体小説に真実味を与える要素にもなろう。また、心に思い浮かぶ二つの事柄を同時に書きあらわすことは不可能であるため、記述内容は線状にならざるを得ず、物事を想起した順序、出来事が発生した順序を時系列にまとめた文章にするには、内容の整理が必要となる。例えば、読み手が存在する手紙と比較すると、手紙にはまとまった考えが書かれることに対し、読み手のいない日記には、思考が混乱したままであっても、その内容を思い浮かぶがまま断片的に書き記すことが可能なのである。すると、バルナブースの「日記」における不均一な記述とは、彼が日記に内面をありのまま表現しようと試みる一方で、それを抑制しようとする気持ちを持ち合わせていることが、日記の記述量という物理的な数によって表現されているともいえよう。その例として、日記の中盤で多く見られる彼が

交際している人物たちとの会話内容の直接話法による引用が、最終部に向かうにつれて減少することは、留意すべき点である。例えば、4 月20日には、友人 Maxime Claremoris（マキシム・クレアモリス）の発言がプレイヤード版の二ページにわたって書かれており[8]、また、6 月11日から13日までの三日間はそれぞれの数ページにわたって、科学者 Gaëtan de Putouarey（ガエタン・ド・ピュトゥアレイ）との会話をピュトゥアレイの発言を中心に引用している[9]。ピュトゥアレイが話した内容の正確さを確認するすべはないにせよ、その描写は録音したテープを一字一句もらさずに書き起こしたかのようである。さらに、バルナブースは 6 月14日の冒頭で「ピュトゥアレイがいないので、言葉で埋める術のない空虚な一日だった。」[10] と述べて、友人の存在の大きさを再提示している。ところが、「日記」の最終部分である 1 月 8 日と 1 月26日では会話内容の引用を示す « »（ギュメ）の使用が極端に減少し、「日記」はバルナブースの語りで占められるのである。これらの結果から、「日記」の冒頭で「絶対の探求」を掲げたバルナブースが、「日記」を書き始めた当初は、一日の出来事や他者の話す内容や口調、またそれに対する自らの発言を克明に再現しながら、自らの内面の表現方法を会得していったと言えよう。このように、バルナブースの内奥の変化が日記の記述を内省的なものへと向かわせたことが、これらの記述形式の変化から確認されるのである。

バルナブースは、日記という書き手にとって応用自在な表現手段によって、ある時は心の赴くまま何ページも書き連ね、またある時には頭の中でまとまった考えや、事実だけを書きとめることができた。そして、「日記」の中に生じる「書く自分」と「書かれる自分の過去」との時差が、彼に事物を客観視させてゆくのである。この効果の蓄積がバルナブースの変化につながると仮定すると、ここではまず、作者ラルボーによる「日記」というジャンルの選択が、バルナブースを新天地へと旅立たせるための有効手段だったと言えるのである。

3.　記述内容の変化――幼年時代の保持――

それでは、「日記」の中でバルナブースはどのように変化するのだろうか。はじめに、バルナブースが「日記」に書く最も古いことがらである幼年時代への言及を検討し、彼が「日記」の最後に選択する帰郷という結論との関わりを考察したい。まずは「日記」の17日目、4月30日の内容を見ることにしよう。

> 実際、僕は今でも子供の頃に感じた気持ちを変わることなく覚えている。つまりそれは眠って夜を過ごす連中に対する優越感だ。[……]眠りに対し、夜は眠るものなどという習慣に対し、両親や女中たちや平凡な人間の思想や原理に対して、幾度となく僕は戦いを挑んだものだ。そして僕は勝った。僕は熱し過ぎた頭を、暁のうえに持たせかけることができた。[11]（傍点強調は原典による）

バルナブースが子供の頃に抱いた感情は、彼の成長後の姿勢の萌芽である。世の常識や一般的な習慣への服従に対して感じる違和感から、それらに逆らい、ついには勝利を収めることによって達成感を得るという構えが、幼少期に育まれたことを示している。またそれは、先行研究や批評に見られる、バルナブースが旅の継続と日記の執筆の積み重ねによって見事に自己確立を果たした、という見解にもあてはまろう。加えて、同じ日の「僕は一介の異邦人に過ぎないが、あえてフランス語で書こうとしている――」[12]との記述も参考になる。バルナブースが « colonial »（「植民地人」）であるとの認識のもとで母語以外の言語による記述を試みることの本源は、幼年時代に自らの内に覚えた違和感に向き合う意気を持ったことに遡るのである。したがって、彼が『全集』をフランス語で執筆しようと試みたこととは、言葉を用いた挑戦であり、違和感を克服するための作業であると言える。

これらの幼年時代の思い出、外国からやってきた異邦人であることの自覚との間に生じる時間の流れは、バルナブースが「日記」執筆の時点の彼と、そこで思い起こす過去の自分に、それぞれ異なる主語人称代名詞を用いることによって表現されている。例えば、幼少期を過ごしたロシアに滞在中の７月21日（日）では、幼年時代と現在の自分とを対比させており、ここで彼は過去の自分を « tu »（「おまえ」）と呼び、次のように語りかけている。

> 僕はそうやって今の僕になったのだ。ハリコフのホテルで泣いていた男の子がみつめている。僕は、おまえの前に現れても恥ずかしくはない。僕はおまえのいいいつけを全部やった。おまえが求めていたよりずっと多くのものを、僕はおまえにもたらすのだ。少しばかりの賢明さをおまえにあげよう。でもそんなものは欲しくないとおまえの言うのが僕には聞こえる。[13]（下線強調は引用者）

この部分では、日記を書く時点のバルナブースが、「ハリコフのホテルで泣いていた男の子」である子供の頃の自分を想起して語りかけている。しかし、語りは一方的で「おまえ」からの返答はないため、内省的な対話のようでもある。そしてバルナブースは、この引用の次の文で、これまで「おまえ」と呼んでいた対象を、« il »（「彼」）と呼び変える。その部分を見てみよう。

> 結構なことだ。彼は満足している。ということはつまり彼は死んでしまったということだ。そして僕は、彼のいた場所に立って、新しい太陽の方に顔を向ける。[14]（下線強調は引用者）

ここでは、前の文でかつての自分に「おまえ」と呼びかけた親しさが消えている。過去の自分を振り返ることで自覚した時間の距離感が、現在

の自分とは遠い存在としての「おまえ」を「彼」へと呼びかえさせたのではないだろうか。このように、バルナブースは日記を書きながら昨今の出来事を振り返るだけでなく、人称を変えて過去の自分に向き合うことで、過ぎた時間を客観的に見ようと試みているのである。

バルナブースが自分に向かって「おまえ」と呼びかける場面は、この日だけではなく、48日目の「土曜日」と49日目の「日曜日」に同様の記述が確認される。両日とも日付が省略されているが、その前日が「6月21日（金曜日）」であるため、6月22日と翌23日の日記であると推察される。少し長くなるが引用して確認しよう。まず48日目では次の通りである。

> ああ！　へっぽこ詩人め、このひと［Gertrude Hansker、ジェルトリュード・ハンスカー夫人］から、たとえ一瞬でも離れて、おまけに憂鬱だの隷属だのと言いだしたとは何としたことだ。おまえがおまえの人生を送るのに最良の手段は、彼女のそばで暮らすことなのだ。おまえの富は、ただ彼女を飾り立て、彼女を満足させるためにあるのだ。おまえの力がおまえに授けられたのも、ただ彼女を守らんがため、おまえの優しさもひたすら彼女を愛するためにこそあるのだ。おまえはフロリー・ベイリー [Florrie Bailey] のあとにくっついて町から町へと歩きまわるはずだった。女だって、次から次へと新しい女に出会うはずだった。しかしついにおまえはこのひとにめぐり会ったのだ。彼女だけは出発させてはならない。[15]（下線強調は引用者）

バルナブースはこの記述の直前に、ハンスカー夫人が夫と離婚して自分と人生を歩むさまを思い描いていたことを「僕のなかの本能がひとりでに物思いにふけっていた。僕は子供のことや僕たちの生活の混和について考え、入念にしかも真剣に彼女に捧げようとしている自分の人生について考えた」[16] と書き記していた。さらに、彼が注15の文章のすぐ後で

人称を「僕」に戻していることから、注15の引用では、日記の著述の時点のバルナブースが、過去を思い起こしながら、かつての自分を非難していると考えられるのである。続いて、49日目の日記の記述を見よう。

> 僕は忘れ去っていた古い日々を再び見出す。彼らは僕をみつめ、僕が彼らを見分けられるように僕の方に顔を向ける。そうだ、それは僕たちだ、僕たちの倦怠だ、役にも立たぬ仕事、古びたしくじり、これから先も苦しむに違いない自尊心。おまえの空しさやおまえの弱さが決定的なものに感じられているその時に、開いた窓からは、街の騒音が侵入してくる……。世間は時をおかず、おまえと反対のことを言い出す。おまえ自身はそれをなんと言う？　おまえはおまえの井戸の中を覗きこみ、そこに映ったものと濁った水をみて、この井戸には底がない、と思ったのだ。しかし、棒を取ってみるがいい、おまえにはすぐ地面が感じられるだろう。おまえが思っていたほど複雑ではないのだとおまえが知ったら、おまえはどんなにがっかりするだろう。そもそも生きるということそれ自体が美しすぎるなどと考えて、おまえは死の腕の中に逃げ込んでしまうにちがいない。[17]（下線強調は引用者）

ここではバルナブースが、「僕」と「おまえ」という過去の自分との対比だけではなく、« nous » や « notre » を用いて「それは僕たちだ、僕たちの倦怠だ」と表現することで、「僕」と「おまえ」との連帯感を表している。この「おまえ」や「彼」は、いずれもバルナブース自身を指しており、全て「僕」に置き換えることが可能である。けれどもバルナブースは、過去と現在の時間的な隔たりを自覚したうえで、過去の自分を客観視できたがゆえに、かつての自分を「おまえ」や「彼」と表現したのではないだろうか。

ひとが過去の情景を思い起こす時、本来ならば視界には入らないはずの自分の全身像が含まれることがある。それは、出来事が過去に属する

ことによって、かつての自分の姿を鏡で見るように客観視できるからであろう。加えて、その出来事に関する全てを、あたかも他者の視点から見るように概観できるようにもなる。バルナブースは、現在の「僕」を過去の「おまえ」または「彼」と対比させることで、その状態を表現したのではないだろうか。さらに、彼が「おまえ」と書く場合には、日記を執筆している時点での彼との結びつきが示され、一方、過去との隔たりを実感したい場合には三人称で「彼」と書き、かつての自分との距離を明らかにしているとも考えられる。つまり、「日記」における人称代名詞の移行は、バルナブースの現在と過去との単純な対比だけではないと言えるのである。

このように、バルナブースの記述内容には、執筆する時点の彼が物事を判断する際の土台となる幼年時代のさまざまな記憶が影響しているのである。とりわけ「日記」に幼年時代への回顧の念がたびたび挿入されることは、彼にとって新しいものとは古いものから生まれるものであり、また未来の答えが過去の中に存在していることを示していると言える。その中で幼年時代の思い出を保ちながらも、彼は人称代名詞などを変化させる方法で、過去の自分との間に距離を置こうと試みている。過去の自分を他者に見立て、客観視することによって、自己を再認識しながら日記の記述を終え、人生の次の段階へと進むのである。

4. 「植民地人」と言語感覚――内面の言葉の影響――

さてここで、バルナブースが、『全集』を、彼にとって母語ではないフランス語で書いている、つまり彼が南米出身者であることに留意しつつ、「日記」に見られる言葉の特徴を見ることにしたい。詩人である彼にとって、書くこととは生きることと不可分であり、またそれは母語ではないフランス語の使用によって確認されることである。ところが、彼は「日記」の終わりで南米の言葉への親しみについて言及し、最終的に

は生まれ故郷でしかないペルーへの帰郷を決意する。それでは、「日記」の時間の流れの中で、バルナブースの言語に対する考え方はどのように認識され、また変化するのだろうか。

まず、バルナブースがヨーロッパで生活することについて、自分が「植民地人」であると重ねて強調することの考察から始めよう。外国人であるという事実と本人の自覚、周囲から促されることによって抱く感情などは、フランス語での著作に取り組むことに関連し、彼の書く行為やその結果にどのように影響するのだろうか。初めに、バルナブースによる「植民地人」についての定義について、4 月19日の日記から引用しよう。

> 『植民地人、われわれ植民地人』（というのも『われわれアメリカ人』などという言い方は、とどのつまりそれ以外のことを意味しないのだから、これはここではっきり承認しておこう）、<u>僕はひとりの植民地人だ。</u>ヨーロッパは僕を欲していない。僕はいつになっても観光客以外の何者でもないのだ。[18]（下線強調は引用者）

この「植民地人」という言葉は、バルナブースが生まれた南米がスペインの属領だったことからも、海外移住者によって開発され支配された土地に住む原住民、とのイメージを読者に与えるだろう。植民地における支配者と被支配者との間に生じるさまざまな摩擦や軋轢、特に被支配者側の不利益を考えると、バルナブースの文脈における「植民地人」という言葉は、海外からヨーロッパに来たことに付随する日常生活の不自由さや、旅から旅へと各国をさすらう放浪者といった、不安定なイメージを伴う。また、バルナブースは「僕はひとりの植民地人だ。」の部分を « *Je suis un colonial.* » とイタリックで強調していることにも留意しておきたい。一般には職業や身分、国籍などをあらわす属詞名詞には冠詞を用いないところを、バルナブースは自分が確かに存在しているというこ

とを具体的に表す手段として不定冠詞 « un » を用い、さらにイタリックで際立たせていると考えられる。このように、「日記」の初期の頃のバルナブースは「自分とは誰か」という問いに対し、「ひとりの植民地人」であることを冠詞の使い方や表記法によって明確に自己定義しようとしているのである。それはまた、万事を明瞭に表現しようとする、言葉に対する意識の高さの現れでもあろう。

次に、複数の言語に通じているバルナブースが、外国語の一つとしてのフランス語をどのように捉えているかについて、以下に二つの例を挙げて検討したい。まず一例目を、4 月23日（金）の日記から引用しよう。

> またしても<u>ブティキスム</u>の発作……もしそんな言い方ができるなら。（フランス語にいささかうんざりするのはそんな時だ、あまりに『ルイ十四世時代の服装』的なのだ。つまり金の刺繍をした硬い襦袢や大きすぎる長靴下やズボンの裾のような感じなのだ。――それというのも、つまりは『ショッピング』にあたる言葉が見つからないからなのだが）。[19]（下線強調は引用者）

引用に挙げた「ブティキスム」(« boutiquisme ») とはラルボーによる造語で、その意味は「店のショーウィンドーを眺めることへの抑えがたい欲求、店に入って買い物せずにはいられないこと」とされている[20]。バルナブースには、英語では « shopping » の一語で納得できることが、フランス語で表現するとなると、英語との比較において大仰に感じられるようである。この例では、事物に対応させる言葉の選択という個人の主観にゆだねられる問題がバルナブースの個性を浮き彫りにしており、言葉に向き合う真摯な姿勢と、習得言語と語彙の多さゆえの悩みが凝縮されていると言えよう。彼には、過去に得た知識と経験が、かえって心理状態や経験に即した言葉を選ぶ妨げになっているのである。

二例目は、バルナブースが 5 月のある木曜日（27日目）に書いた、監

獄見学の際のエピソードに見られる。そこには、監獄の所長が彼を出迎えた時の様子が次のように語られている。

> V 監獄で。所長が自動車で迎えにきてくれた。その一挙一投足がまったくシニョリーレな男（この言葉に相当するフランス語は見つからない。『紳士風』とでも言ったらいいのだろうか？）。[21]（下線強調は引用者）

「シニョーレ」(« signoriles ») とはイタリア語で「紳士的な」という意味であるが、バルナブースは監獄の所長を形容するための言葉をフランス語の中に見いだせずにいる。先の « boutiquisme » にせよ、この « signoriles » の例にせよ、これらは彼がフランス語を母語としない外国人であることを象徴し、強調するものである。この二例に見られるフランス語とそれ以外の言語との対比は、バルナブースの言葉への意識がいかに分かちがたく彼の内面の意識と結びついているのかを示している。さらに彼は、「日記」の最終日の１月26日に次のように述べている。

> 古い世界よ、僕がおまえを既に忘れているように、僕を忘れるがいい。僕はもう既にフランス語でものを考える習慣を失っている。家で毎日話している僕の母国語が少しずつ再び僕の内面の言葉になりつつある。あのカスティーリアの言葉が、ひとつずつ、僕の精神の風土にふさわしいものになり、僕のこれまでの人生の朦朧とした思い出の中でも、最も見極め難く、最も懐かしい思い出をよみがえらせている……[22]（下線強調は引用者）

引用部分を細かく見てみよう。まず「僕の母国語」(« ma langue natale »)、とは「カスティーリアの言葉」(« ces mots castillans »)、すなわちスペイン語である。そのスペイン語が、バルナブースがこれまで用いていたフ

ランス語に代わって、「僕の精神」(« mon esprit ») を表現するにふさわしい「僕の内面の言葉」(« mon langage intérieur ») になろうとしているのである。しかも彼が、「僕の言葉」ではなく「僕の内面の言葉」と述べていることに注意が必要である。このことを日記の最終日という故郷への旅立ちの直前に書くこと、それは、帰郷の覚悟を決めて心身ともに新天地の人になろうとする彼の決意表明に他ならない。また、「古い世界」(« (le) vieux monde ») とは、バルナブースの出生地の南米ではなく、ヨーロッパおよび彼のヨーロッパでの生活を指している。それは彼がその前月の12月22日の日記において「僕の世界」(« mon monde ») と表現していたものだが、彼は「僕の世界」と書きながらも、「ある日僕は、かつて『僕の世界』と呼んでいたものにまた戻った。最初にわかったのは、僕がもはやその世界に属していないということだった」[23] と、自分の居場所についての考え方を急展開させる。彼は周囲の人間との交際への疲れから「時と諸般の事情とが僕たちをひきさいていた」[24] と述べ、帰郷への決意を固めるのである。« mon monde » に付く所有形容詞 « mon » は、彼がそれまで過ごしてきた環境への愛着を示していた。けれども、彼がこれから住む世界を「新しい世界」と表現することはないのである。なぜなら、ひとたび新天地に移り住めば、今度はそこが彼にとっての「僕の世界」になるからである。このバルナブースの心理状態に対応した « monde » に付される冠詞の移行は、「僕の世界」に住むに応じた言語の必要性を示すものである。すなわち、彼がどの世界に属するのか、それが彼の内面の言葉との関係によるものであることが、ここで明らかになるのである。

ところで、かつてのバルナブースは、フランス語で話すことについて次のように記していた。以下は「日記」の48日目、「土曜日」の一節である。その前日の日付（6 月21日・金曜日）から推測して、6 月22日のものと思われる。

僕はスイッチを切り替え、自分の考えていることをモリエールの言葉をあやつって表現する（もちろん僕にできる限りの話だが）。毎日つけていた日記、それにピュトゥアレイとの会話のおかげで、僕のフランス語もさびつかずに済んだ。[25]（下線強調は引用者）

ここでは、諸外国語に長けたバルナブースが、詩人として作品を書いていながらもフランス語を用いる際には一段階必要であり、頭の中の使用言語の切り替えが「スイッチを切り替える」(« faire l'aiguillage ») との表現によって、鉄道線路で車両を他の線路に向かわせる際の転轍機（ポイント）の操作を例に説明されている。バルナブースは詩篇の中の « Ode »（「頌歌」）において鉄道を賛美しているが[26]、鉄道とは常に前進し、ひとたび路線を変更すれば来た道を戻ることのできない、定められた線路を終着地に向かってひた走る乗り物である。「日記」の終章において、彼が内面の言葉としてスペイン語を選択したことを重ね合わせれば、この比喩表現に込められた使用言語の選択の重みが、鉄道という重厚長大な機械の外観とともに明らかになる。そして、バルナブースは言葉の重要性を、「日記」を彼が飼っているオウムがスペイン語で « Loro »（「オウム」）と繰り返す場面で終えることで示している[27]。彼の内面の変化は、「日記」に書き記された内なる言葉だけでなく、ひとの言葉を巧みにまねるという特徴を持つオウムが復唱する言葉が既に変化していることによっても表現されているのである。

5. おわりに

これまで見てきたように、バルナブースの「日記」は自己省察を含む「内心の日記」である。彼は、日記の執筆という継続した記述行為によって、幼年時代の回顧や他者の模倣、使用言語の選択といった複数の自己探求の過程を記録し、その結論として帰郷という一つの答えにたどり

着いた。「日記」を書き始めた当初は、「植民地人」という生い立ちにまつわる特徴を前面に出すためにフランス語以外の言葉を繰り返し用いて強調するが、やがて自らが綴る言葉にはテクストという外面で図れるものではない、「内面」の言葉の反映の必要性を感じたのである。言葉をあやつり「小説」や「詩」を執筆する作家でもあった彼にとって、心に思うままの言葉を綴ることは、母語の使用によってのみ実現可能だったのではないだろうか。それゆえ、彼の帰郷は文明社会であるヨーロッパからの逃避ではなく、母語の使用によって心の内を思うままに表現するための、再生の機会だと考えられるのである。

本稿で取り上げた「日記」は、バルナブースが出版によって読者に提供する意思を持ちながら記述したものである。その設定上、そこに綴られる彼の内面は読み手の存在を意識したものである。したがって、「日記」はバルナブースの「独白」ではあるが、「内的」独白ではないとも言える[28]。しかし、「日記」に見られる日付によって区切られた断章形式は、ラルボーの後の作品にあらわれる「内的独白」の手法に連なるものである。また、『全集』の第二部に収録されていた38篇の詩のほぼ全篇が「自由詩」であり、また、この「自由詩」の形式に「内的独白」との関連が見られることから、複数のジャンルの作品を収録した『全集』は、単なるジャンルの移行だけでなく、作者ラルボーにおける作風、文体の変化の記録としても読みうる作品であろう。日を追うごとに変化するバルナブースの人物像が作者ラルボーの文体の変化を伴うとの仮定については、その検証を今後の課題とし、稿を改めて論じたい。

注

1）*A. O. Barnabooth, ses œuvres complètes, c'est-à-dire un conte, ses poésies et son journal intime* のテクストは、Valery Larbaud, « A. O. Barnabooth, ses œuvres complètes, c'est-à-dire un conte, ses poésies et son journal intime » in *Œuvres*, préface de Marcel Arland, Commentaires et notes par G. Jean- Aubry et Robert Mallet, Essai de bibliographie chronologique par Jacqueline Famerie, Paris,

Gallimard, Bibliothèque de la pléiade, 1958 を使用し、引用には *A.O.B., Pléiade* とする。なお邦訳は、ヴァレリー・ラルボー、岩崎力訳『A. O. バルナブース全集』河出書房新社、1973年を参照したうえでの拙訳である。

2）『裕福な好事家の詩』は自費出版で200部のみ作られ、短篇 « Le Pauvre Chemisier »（「哀れなシャツ屋」）と、« Les Borborygmes »（「ボルボリグム」）および « Ievropa »（「イエヴローパ」）の二部構成である52篇の「詩篇」、ならびに「伝記」が収録されていた。「伝記」から「日記」への改作の経緯については、拙稿「ラルボーと『バルナブース』――『A. O. バルナブース全集』における作者と作品――」『学習院大学人文科学論集』第17号、学習院大学大学院人文科学研究科、2008年、225−241頁で論じている。また、ジッドの日記形式へのこだわりがフランス文学史においても際立っていることについては、下記の論文を参照した。小坂美樹「アンドレ・ジッドの『女の学校』――日記体小説における作者と「編集者」について――」『テクストの生理学』柏木隆雄教授退職記念論文集刊行会編、朝日出版社、2008年、287−299頁。

3）*N.R.F.* における「日記」の掲載は下記のとおり。1913年 2 月号 (nº. 50), pp. 177-237（Premier Cahier、4 月11日−5 月 7 日、20日分）、3 月号 (nº. 51), pp. 399-471（5 月10日−6 月 4 日、11日分）、4 月号 (nº. 52), pp. 579-630（6 月 6 日−Venise 18、13日分）、5 月号 (nº. 53), pp. 766-814（Troisième Cahier、6 月19日−7 月21日、7 日分）、6 月号 (nº. 54), pp. 966-1000（Torieste, Moscou, Serghièvo Pétrovskoïe − FIN、15日分）

4）樋口裕一「V. Larbaud における『小説』の問題――*A. O. Barnabooth* の « Journal intime » をめぐって――」『フランス語フランス文学研究』第35号、日本フランス語フランス文学会、1979年、89頁、および西村靖敬『1920年代パリの文学――「中心」と「周縁」のダイナミズム』多賀出版、2001年、19頁を参照した。

5）*A.O.B., Pléiade*, p. 84（下線強調は引用者）.

6）*A.O.B., Pléiade*, p. 280.

7）*A.O.B., Pléiade*, p. 290.

8）*A.O.B., Pléiade*, pp. 99-101.

9）*A.O.B., Pléiade*, pp. 194-205.

10）*A.O.B., Pléiade*, p. 205.

11）*A.O.B., Pléiade*, p. 114.

12）*A.O.B., Pléiade*, p. 115.

13）*A.O.B., Pléiade*, p. 249.

14）*Ibid.*

15）*A.O.B., Pléiade*, p. 233.

16）*A.O.B., Pléiade*, p. 232.
17）*A.O.B., Pléiade*, p. 247.
18）*A.O.B., Pléiade*, pp. 96-97.
19）*A.O.B., Pléiade*, p. 104.
20）*Trésor de la langue française : Dictionnaire de la langue du XIXe et du XXe siècle (1789-1960)* tome 4, publié sous la direction de Paul Imbs, Paris, Édition du centrare national de la recherche scientifique, 1975, p. 861.
21）*A.O.B., Pléiade*, p. 159.
22）*A.O.B., Pléiade*, pp. 303-304.
23）*A.O.B., Pléiade*, p. 292（下線強調は引用者）．なお、« mon monde » は、この12月22日月曜日の記述の中で初めて用いられた。
24）*A.O.B., Pléiade*, p. 293.
25）*A.O.B., Pléiade*, p. 231.
26）« Ode », *A.O.B., Pléiade*, p. 44.
27）*A.O.B., Pléiade*, p. 304.
28）藤平誠二「『内的独白』文体の内的構造」『文体論研究』日本文体論協会［編］、第26巻、1979年、49頁を参考にした。

L'évolution de « Barnabooth » : Sa personnalité selon le « Journal intime » d'*A. O. Barnabooth, ses œuvres complètes*

SATÔ, Miyuki

Valery Larbaud (1881-1957) est l'auteur d'*A. O. Barnabooth, ses œuvres complètes, c'est-à-dire un conte, ses poésies et son journal intime* en 1913. Le personnage principal en est Archibald Olson Barnabooth, qui rédige les trois textes composant le roman et, se transforme particulièrement dans la troisième partie, « Journal intime ». Son évolution vers la maturité a pour résultat la décision de regagner le pays de ses origines. Or, comment a-t-il le personnage évolué ?

Le choix de la forme du journal est convenable pour observer ce changement. Pendant neuf mois, Barnabooth a irrégulièrement écrit quatre cahiers. Bien qu'il existe 255 jours sans entrées, ces blancs ne marquent pas d'interrupteur dans la recherche de l'absolu du personnage, cherchant à se trouver lui-même. Le style du journal, au caractère fragmentaire, montre avec efficacité les sentiments de Barnabooth. Grâce à ces journaux, nous pouvons suivre son itinéraire et arriver à sa conclusion.

Ensuite, nous pouvons remarquer que Barnabooth conserve le contact avec son passé, surtout avec son enfance. Il exprime l'écart qu'il y a entre son enfance et son présent lorsqu'il évoque rétrospectivement ses souvenirs d'enfance. L'emploi judicieux du pronoms personnel lui permet de faire objectivement face à son passé ou à ses regrets. Autrement dit, le journal intime n'est pas seulement un enregistrement de la vie de tous les jours, mais aussi un processus dans cette quête d'identité.

Alors que Barnabooth écrit son journal intime en français, il tient à affirmer son appartenance à un pays colonial et à une autre langue. Pendant son adolescence, il a appris d'autres langues étrangères mais, comme il a longtemps habité dans les pays d'outre-mer, il a toujours vécu dans un décalage linguistique. S'il décide de rentrer dans son pays natal, à et donc d'en espagnol, ce

n’est pas pour s’évader de l’Europe, mais parce qu’il a trouvé son style de vie. Son journal intime lui a clairement révélé son cœur permis de retrouver son passé. Pour lui, le langage s’unit fortement à l’intimité.

Ainsi, le « Journal intime » est un journal d’introspection. Pour Barnabooth, la forme du journal intime l’oblige à fixer les yeux sur lui-même et à manifester ses idées : ce qui lui permet d’évoluer et de renaître à travers le « Journal intime ».

（人文科学研究科フランス文学専攻　博士後期課程 2 年）